

発表区分：個人発表

発表題目：「人格」の実体化に関する言語哲学的試論

発表者：哲学・思想文化学専修4年 岩本智孝

連絡先：u855565d@ecs.osaka-u.ac.jp

発表要旨：

本発表では、ガレス・エヴァンズの「名前の因果説」（池田・佐藤・松阪訳、『言語哲学重要論文集』（2013、松阪陽一編訳）所収）をもとに言語哲学的観点から、廣松渉の「人格」批判に抗して、ある人物がその人物であること、すなわち、相対的な一つの役柄ではなく、絶対的で根本的な主体としての「人格」が実体化していると主張する。具体的には、エヴァンズによって整理された、名前に関する三つの学説のうち、人格を〈役柄〉の束と捉える廣松の〈役柄〉論が、ある同じ対象を、一群の話者が記述の束として名前をつけ、使用すると信じている「名前が表示するものについての記述説」に近いことを明らかにし、エヴァンズの議論を手掛かりに〈役柄〉論の問題点を指摘する。

廣松は、主体の二肢性と客体の二肢性からなる四肢構造論を展開した。廣松が四肢構造論を展開した背景には、20世紀における認識論の行き詰まりとそれに伴う近代的な「主観 - 客観」図式への懐疑、そして、「人間の意識が本源的に社会化され共同主観化されているという与件」（『世界の共同主観的存在構造』（2017）、35頁）を出発点とするという廣松の企図がある。廣松によれば、日常生活において、われわれ主体は常に「役柄」をもって扮技しているという（同書、166頁）。たとえば、ある学者が学会において、「学会の司会者」として登壇するといった例を廣松は挙げている（同頁）。ここではつまり、ある学者が「学会の司会者」として扮技するという主体の二肢性が表れている。

廣松の「人格」批判は、先に述べた、近代的な「主観 - 客観」図式への懐疑の延長にある。廣松は、「人びとは、日常的思念においては、「人格」なるものをとかく実体化して考えがちである」（同書、170頁）とし、その現実的な意味を認めつつも、「人は常に必ず一定の役柄を演じているのであるから、[...]「自己としての自己」と「俳優としての自己」とのレアールな区別はなりたた」（同頁）ず、「[...]人格というのは扮技的諸機能の一総体にほかならない。これを措いて「人格」なるものは存在しない」（同書、171頁）と結論づける。廣松がここで批判対象として念頭に置いている「人格」とは、「近代的「個我」主義の発想」に由来する、主体としての「人格」である。それに対して廣松は、舞台上の仮装を意味するペルソナという語源に立ち返ろうとしているのである。

本発表では、以下の問いにわれわれがどのように答えるのかを考察し、廣松の「人格」批判への反論を試みる。

Q「あの人は誰ですか」

Qに対し、「あの人は、Xの父親です」という答えが想定される。この場合、廣松が言うところの〈役柄〉の一つ、あるいは名前の議論で言うところの記述の一つが答えられたことになる。しかし、〈役柄〉（記述）が一つだけでは、答えとして不十分であることがありうる。だからと言って、「あの人」の〈役柄〉（記述）をすべて列挙しなければ答えとして十分なものにならないわけではない。したがって、「扮技的諸機能の一総体」を「人格」と捉える廣松の議論には問題がある。答えとして十分なものとなるのは、たとえば、話者と聞き手のあいだでXという人物に関する共通の知識があるような場合である。このとき、「Xの父親」という役柄（記述）は、エヴァンズが言うところの首尾一貫した「情報」になっている。Qは、名前と〈役柄〉（群）、あるいは記述（群）の担い手（エヴァンズの言う「情報の源泉」）とを結びつける関係を知るための問いでありうるという立場に私は立つ。このとき、すなわち、エヴァンズと同じ立場に立つとき、名前を負う主体としての「人格」はまさに「源泉」という在り方で実体化している。つまり、記述説を斥けて因果説を乗り越えたエヴァンズの仮説を正当化することと、その仮説と「人格」の実体化の関連を示すことによって、「人格」の実体化が正当化されるのである。